

詩集にみる「彼女」の物語

ちんすこうりな詩集『女の子のためのセックス』について

秋吉里実

はじめに

- 1 刹那的
 - (1) 完璧な関係
 - (2) 一時の関係
 - 2 不均衡
 - 3 穴
 - 4 嘘
 - (1) 嘘は幸せの引きかえ
 - (2) 嘘で自分を守る
 - (3) 嘘の見解
 - (4) 嘘と本当
 - (5) 本心
 - 5 忘れたいこと
 - 6 固定観念
- おわりに

はじめに

ちんすこうりなさんの詩集を読み終え、強く印象に残ったのは、刹那的ということだった。詩集『女の子のためのセックス』には、JR山手線を描いた詩が何篇かある。なかでも、「山手線」の詩は、思い出の街やユニークな街など、一周29駅あるうち20駅を端的に描いた作品である。このなかに、渋谷駅が出てくる。

渋谷
優しい刹那であふれるまち
いちばん好きなまち

(「山手線」部分)

彼女のいちばん好きな街は渋谷だという。なぜなら、優しい「刹那」であふれる街だからだ。続いて、「宮益方面は知らない」の詩も読んでみたい。

渋谷駅から股が割れて尿が流れる
あみだくじの一本はラブホテルへ通じる
コンクリートの下は腐っていてたまに異変に気づく
ラブホテルがひしめいて扉を開けると部屋がひしめき102を開けるとやはりひしめいている
彼女のしたは真っピンクな嘘
(中略)
渋谷？ それはすべてを忘れるための巨大な装置！

(「宮益方面は知らない」冒頭)

渋谷は、「すべてを忘れるための巨大な装置」とも言っている。彼女は何を忘れたいのか？

また、「彼女のしたは真っピンクな嘘」にもあるように、ちんすこうさんの詩集には、嘘という言葉も数多く出てくる。詩の作者と、詩に登場する人物が同じであるとは限らない。ここでは、詩の登場人物を「彼女」と呼ぶことにし、「刹那的」、「忘れたいこと」、「嘘」をキーワードとして、詩集『女の子のためのセックス』を読んでいきたい。

1 刹那的

(1) 完璧な関係

刹那的な生き方というのは、今この瞬間だけを充実させて生きようとするのである。それは一時的であり、はかないものでもある。ちんすこうさんの詩には、刹那的に生きる人物を描いた作品が多い。

あなたという夜はいつも完璧だった。清潔で皺のないシーツの間で身体の表面が触れ合う滑らかさ。名前を呼びあう温度。欲しがらる強さ。見えているものと見えないものすべてのせたシーソーが釣りあっている。空調、テーブルや椅子までもが欠けてはならないものとして静かにそこに佇んでいた。一ミリの誤差もなく。
(「swissôtel」冒頭)

一ミリの誤差もなく、あなたとわたしの愛情が釣り合っている。空調やテーブル、椅子までもが、欠けることなくここに存在している。完璧な二人と完璧な部屋。ここで重要なのは、相手と自分の愛情の量、感じ方、信頼し合う量がぴったり同じであるということである。上記の詩は切なく、幸福にあふれている。

同じように風景を見ることができたら
同じように音を聞くことが
同じように笑ったり傷ついたり
ただ同じように感じる事ができたら
(中略)
約束なんていら
契約もいら
義務も責任もいら
いら
私があな
あなたが私を欲しがらるぶんだけ
一緒に生きて

(「夜明け前に」部分)

「同じように風景を見ること」、「同じように音を聞くこと」は、単に、お互いが同じ景色、同じ音を一緒に聞くことだけにとどまらない。同じものを隣で見ている、感じ方が一致するとは限らない。彼女は、あなたとわたしが同じように感じることを求め

る。お互いの感性が同じであることが重要なのである。

おそらく、お互いがお互いを求め合う量や感性が釣り合っているあいだは、二人の関係はどこまでも続いていくのだろう。だが、どちらか片方の量に変化が起きたとき、シーソーは傾く。完璧な関係が崩れる。上記の詩に、「約束なんていない／契約もない／義務も責任もない／いないそんな優しさ」とあるが、彼女は二人の関係を維持するためだけの約束や義務、責任を放棄する。

子供の頃から
ロマンチックが好き
ロマンチックって
世界に二人だけしか存在しない瞬間のこと
そんな瞬間が
ずっと続いて
(中略)
人は変わっていくから
誰のものにもできないって知った

(「うみべの女の子」部分)

お互いが「同じ」という状態は、永遠に続くものだろうか。相手が変わっていくことを止めることはできない。自分のことも止められない。ある日、「人は変わっていくから／誰のものにもできない」ことを彼女は知ってしまった。当然、約束や義務、責任で二人の関係をつなぐことはしない。そこに自身の求める関係はないのである。

人は変わっていく。だからこそ、お互いのシーソーが釣り合っている今が何よりも重要なのであり、この瞬間に自分のすべてを賭ける、という彼女の刹那的な生き方が見えてくる。

(2) 一時の関係

ちんすこうさんには、一時の男女の関係を描いた詩もある。「お金で買われるのは気持ちいい」という書き出しで始まる詩「バイバイ」がそれに当たる。お店にいる大勢の女の子の中から自分が選ばれ、相手と「昔から恋人だったかのように／手をつないで／風をきって歩く」場面は、なんとも爽やかだ。彼女は、「たくさんのホテルの中の一つに／入るまでの時間が／一番好き」だという。そして、「ホテルを出て／バイバイする時が／二番目に好き」と書く。「お互いが／同じくらい／同じ気持ちで／想いあう／もう会うことのない／一度体を重ねただけの／相手の幸せを／その瞬間／優しい気持ちで祈る／／バイバイ」。

相手が求めるのは彼女の体だけかもしれない。だが、彼女は一時の関係においても、「お互いが／同じくらい／同じ気持ちで／想いあう」ことを求める。「一度体を重ねただけの」二人が、同じ気持ちで相手を想いあえるもの、それはお互いの孤独かもしれない。彼女にとって、お金で買う、買われる、という関係はそれほど大した問題ではないのだろう。それよりも、相手と自分が「同じ」気持ちであることが重要なのだ。彼女の刹那的な生き方、それは、たとえ一時的な関係であっても、彼女の賭けるものがぶれることはない。

また、彼女はもう二度と会うことのない相手の幸せをも祈る。祈るという言葉は、「始まりや終わり」の詩にも出てくる。この詩は、夜更けの商店街で酔ったサラリーマンが土下座している光景から始まる。「泣いていたのかもしれない」と彼女は思う。これはサラリーマンのことを指しているのだが、彼女自身が泣いていたようにも取れる。彼女は、「ホテル代を払い／男に体をあけわたす想像をする」。ふと、彼女は

「救われるかもしれない」と思う。通り過ぎた道を今すぐ「引き返して／手をさしのべて／肌を重ねて／見ず知らずの男の涙が／私のほおに落ちる」。これらは彼女の想像であり、実際に男のもとへ引き返すことはしない。彼女は酔った男から去って行く。だが、この光景を彼女は胸に持ち続ける。男の孤独と寂しさ。もしかすると、男と同じものが彼女のなかにもあったのかもしれない。もしそうなら、救われるのは彼女自身であるともいえる。彼女は見ず知らずの男の幸せを、「出口が見えるまでのあいだ／少しだけいける」のである。

2 不均衡

第1章では、お互いのシーソーが釣り合っているときの関係を述べてきた。では、シーソーが釣り合わなくなってしまったらどうなるのか。「恋文」の詩の冒頭に次のようにある。「全力で信じてこられたら／全力で裏切りたくなる」。おそらく、普段、彼女が相手を信頼する量は、全力ではないのだろう。それは相手も同じである。お互いがお互いを信頼する量が同じであるとき、彼女は安定している。だが、相手が全力で信じてきたとき、彼女はそれを許さない。全力で相手を裏切ろうとするのだ。彼女は、「信じられると裏切りたくなるのはなんで／どうしていつから／自分を剥いで見つめていくことは苦しい」と書いている。信じられると裏切りたくなるのはなぜか？ 私は、彼女が自分自身を信じていないからだと考えている。徹底した自己への不信感があると見ている。

「スマホのメモ欄」の詩の後半に、「君、たとえ僕と一緒にいても絶対浮気するよね。でもいいよ。受け入れるよ。／いつも同じものだったら飽きるでしょ。心が奪われなければ、それでいいよ」という男の言葉に、「え、いいの？ そんな人初めて。／でも好きだから、しないよ。いや、するか。するわ。」と彼女が答える場面がある。第1章（1）の後半で、「人は変わっていくから／誰のものにもできない」という彼女の詩について述べた。彼女は、約束や義務、責任で二人の関係をつなぐことはしない。従って、上記の彼女の受け答えは当然であるといえる。彼女は浮気をするかもしれない。しないかもしれない。今、この瞬間以後の自分は、誰のものでもない。また、この詩の中間部分に、「選択には責任が伴うが自分は責任を放棄している」という一文がある。この詩の場合、第一の選択とは、男と結婚するか、しないかという選択、第二は、男と一緒になった場合、彼女が浮気をするか、しないかという選択である。

「選択には責任が伴う」とあるように、どれか一つを自分の意志で選んでいくことは、大変な責任を伴う。自分で考え、自分で判断し、自分で決断する。そのことに対し、自分で責任を取る。相手がある場合はなおさらである。彼女は、「自分は責任を放棄している」と書く。彼女は、選択したあとの自分の行動に自信が持てないのではないか。自分への疑いがあるのではないかと私は考えている。自分への不信があるからこそ、「全力で信じてこられたら／全力で裏切りたくなる」のである。なぜなら、全力で信じてくる相手は、彼女にとって脅威となるからだ。

3 穴

彼女の自分への不信感は、しばしば、「穴」という言葉で表現されているのではないかと考えている。なぜ彼女は自分を信用することができないのか、という問い

に、「穴」が存在するからだとは私は答えない。

勃起した男性器を
穴に入れて
こすると気持ちがいい
ただそれだけのことだ
人間は
ばかみたいだ
そんな簡単なことは
誰とでもできるよ
(中略)
穴なんだけど
ただの
真っ暗闇の
穴

穴がどこに続いているのか
思い出して
体から涙があふれた

(「女の穴」部分)

自分の「穴」が、どこを出発として現在まで続いているのか彼女は知っている。過去をさかのぼり、「穴」のあいた原因を思い出すと、彼女の体は涙であふれるのだ。穴があいてしまった出来事が何だったのかは書かれていない。彼女が被害者だったのか、加害者だったのか、それも読者には分からない。だが、その出来事は彼女を徹底的に打ちのめした。彼女は「真っ暗闇の穴」を自分の中に持ってしまったのである。

深刻な穴を、彼女が自分で痛めつけるような詩が、「いずみさん」の中間部分にある。「モノみたいに扱われるセックスが／よくて／体にあいている穴がぜんぶ／一回の射精のためだけに乱用されるのが／よくて」とある。男からモノのように扱われ、彼女もモノとして男を扱っている。「穴」が、男に「乱用される」のがいいとあるが、彼女の投げやりな気持ちの裏に、深い穴を抱えてしまった苦しみが見えてくる。詩はその後、「満ちないね」と書かれており、彼女が幸せでないことが読み取れる。

次に、「底」の詩を冒頭から全文読んでいきたい。「突き落とされた／ここは／じぶんがいちばん／よく知っているばしょだ」。彼女が突き落とされ、彼女がよく知っている場所といえは、「穴」であろう。「たくさんの穴の中に／埋めた食べもの／ひとつ／ひとつ掘りかえして／いい具合に腐った／食べものの／気持ちを考えながら／食べる」。穴の底に突き落とされた彼女。そこには、以前、多くの穴を掘って埋めた、たくさんの食べものがある。それらを一つ一つ掘りかえしてみると、すでに食べものは腐っている。彼女はそれを食べなければならない。しかも、「食べものの気持ちを考えながら」食べるのだ。「くるしい／全部食べないと／きっとここから出られないのだ／じぶんは／すごく／恥ずかしいことをしている／平らげるまえに／死ぬかもしれない／ほんもうだ／誰にもみられずにすむ」。

彼女がたくさんの穴の中に埋めた「食べもの」とは何か。「食べもの」の正体、それは、ちんすこうさんの詩集に頻繁に出てくる「嘘」ではないかと私は考えている。彼女は自分の「穴」の中に、たくさんの「嘘」を埋めてきた。それは年月が経ち、すでに腐っている。突き落とされた彼女は、「穴」に埋めた「嘘」を一つずつ掘りかえし、「嘘」の気持ちを考えながら、「嘘」を吟味しなければ、ここから出られない。

彼女を突き落とした犯人の言葉で、この詩は終わる。「上の方で／突き落とされたじぶ

んが／ばかと言った」。

4 嘘

「はじめに」でも書いたように、ちんすこうさんの詩集には、「嘘」という言葉が頻繁に出てくる。主に、「嘘」を5つに分類して考えてみたい。

(1) 嘘は幸せの引きかえ

嘘をつくことで、一時の幸せを手に入れるというものである。ここでは、幸せを得るための手段として嘘が使われている。「東京」の詩に、「東京を離れて／一抹の寂しさと／もう私 嘘をつかなくていいんだ、という安堵／嘘をついて手に入れたかった／一時のしあわせ」とある。

また、「雨」の詩には、「重ねた嘘と引きかえに／ここに二人がいるから／雨に降られても当然だったんだ」とある。嘘を重ねたことによって、今、二人は幸せのなかにいる。「雨に降られても当然だったんだ」は、嘘を罪ととらえ、二人が雨に降られてしまったのは当然の罰であると考えられている。

(2) 嘘で自分を守る

相手が自分に近づけないようにするための嘘である。「ちひろ／山手線」の詩の中間部分に、次の一文がある。「体と体の間に言葉が溢れて口に出したそばから嘘にして／近づけないようにしてしまう」。これは、相手がこれ以上彼女の領域に踏み込まないようにするために使う嘘だと考える。自分の領域に踏み込ませないことは、自分を守ることにつながってくる。

(3) 嘘の見解

嘘についての考え方を拾ったものである。「そこにはなにもない」の詩は、「嘘について考えてる／嘘をつくとは／支配することだ／支配するとは／守ることだ／誰から／わたしとあなた以外のものから」とある。

「愛子ちゃん」の詩には、「嘘はついてもいいけど欺いたり騙したりするのはよくないんだ／誰かを喜ばせたり 誰かを傷つけないための嘘もあるから／だけど／同じだよ！ って叫ぶだろうね／じゃあ愛子ちゃんのいう嘘のない世界に行ったら／もっと優しくないよ」とある。世間では嘘は悪いことだと思われているが、優しい嘘もあることを表している。また、この詩には、お互いが信じ合えるのは会っている時間だけでも書かれている。「きみと会っている時は／嘘がないから／嬉しい／言葉はぜんぶほんと／体温も表情もぜんぶ／すごく信じている1分とか1時間／わたしもぜんぶほんと／だから嬉しいよ／／愛子ちゃん、／やっぱり／1分とか1時間で／じゅうぶんだよ」とある。なぜなら、「会ってる時間以外は／相手は何してるかなんてわかんない」からである。第1章で述べた刹那的な関係がここにも見られる。詩は、「信じ切らないと／嘘は消えない／世界から」とも記されている。

(4) 嘘と本当

彼女にとって、何が嘘で、何が本当か分からなくなっているというものであ

る。「おっぱぶ」の詩で、ふうかちゃんという女の子が話す言葉に、「自分にも他人にも嘘をつけないことを、不器用っていうんだと思います」とある。嘘をつく彼女は、器用に生きられるようになったのだろうか。

「スマホのメモ欄」の詩では、「私がなにか言うと全部嘘っぽい／しらじらしくて嫌になる」とある。これは、本当のことでさえ、彼女の言葉は嘘に聞こえるということだ。また、「宮益方面は知らない」の詩には、「本当は嘘のない世界に行きたいという嘘もう何が本当で何が嘘か考えるのやめた」とある。彼女は、自分の言葉が嘘か本当か分からなくなっている。自分の本心はどこにあるのか、それを考えている自分の言葉が、すでに嘘として聞こえてしまうのだろうか。

(5) 本心

ここでは、彼女の本心が書かれている部分を見ていきたい。「愛子ちゃん」の詩に、「嘘のない世界に行きたいと願い続けた愛子ちゃん／わたしも行きたいけど／わたしが一番嘘つきだ／何か一つ信じたいよ／(中略)／嘘は嫌いだよ／わたしも嫌いだよ／些細な嘘も本当はいやなの／広告のちっぽけな嘘も」とある。これこそが、彼女の本心だろう。

また、第2章で引用した「恋文」の詩の全文は次のようになっている。「全力で信じてこられたら／全力で裏切りたくなる／楽する自分を卒業したい／誠実になりたい／誰も馬鹿にしたくない／裏切りたくない／一人残らず尊敬したい／信じられると裏切りたくなるのはなんで／どうしていつから／自分を剥いで見つめていくことは苦しい／嫌われたくなくて／このごにおよんでまだ嘘をついている／嘘をつきたくない／正直でありたい／誠実な人に誠実でありたい／嘘をつく人にもつかない人にも／嘘をつきたくない／真面目になりたい／まともになりたい／苦労と努力は違うと思ってたけど／とにかくがんばりたい／そしたら／もう一度／きみに会いたい」。彼女は、嘘をつく自分に疲れ切っている。

第3章で述べたように、彼女は自分の「穴」に、たくさんの「嘘」を埋めてきた。「穴」を忘れるために、「嘘」が必要だったのだろうか。だが、嘘は彼女を見失わせる。彼女の自分に対する不信感は、彼女の深い「穴」、穴によって生じたたくさんの「嘘」によるものではないかと私はとらえている。

5 忘れたいこと

彼女の詩には、今と昔を比較する場面が出てくる。「スマホのメモ欄」の詩に、「私はもう二度と誰かに本当に大切にされることはない／たった一人の女の子にはなれない／悲しい／乙女 v s ヤリマンの葛藤」とある。また、「ちんちん」の詩にも、「あたたかさの中でこう思ったんだ／私はもう二度と／本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはないんだって」とある。彼女は今後、誰かに「本当に」大切にされることはないと思込んでいる。

「おっぱぶ2」の詩の最後に、「ハイヒールのかかとを／すり減らしながら／すり減らされながら／元通りになることはなくて／あられもない／かつかつという音を／ごまかしながら歩いて行く」とある。「ごまかしながら歩いて行く」には、自分をあきらめ、放棄するとともに、そうせざるを得ない切なさが込められている。彼女は自分をすり減らし、すり減らされながらここまで来た。今の自分は、昔の自分と大きな隔たりができてしまっている。

「はじめに」で、キーワードとして挙げた「忘れたいこと」は、彼女の「穴」、たくさんの「嘘」、今の自分のことではないかと私は解している。

6 固定観念

詩集を通して、「彼女」の生き方を見てきたが、私は、彼女が自分の固定観念に強く縛られ、身動きが取れなくなっているのではないかと感じた。例えば、自分への不信感から、他人も自分と同じように信用できないと思っていること。約束も義務も責任もいらないということ。今さえ充実していればそれでいいこと。今後、自分が誰かに大切にされることはないと思っていること、等である。

孤独と向き合いながら、その都度、彼女はこれらを身につけてきたのだろう。彼女の固定観念は、彼女が生きるために必要な柱だったのだと考える。また、彼女を守る鎧でもあったと思う。自分の経験によって築き上げてきた価値観は、身動きが取れなくなってもなお、容易には壊れない。なぜなら、柱としてきた価値観を壊すとなると、それまでの彼女の生き方を否定することにもつながり、自分の存在が脅かされることになるからである。

前に述べたように、「うみべの女の子」の詩で、彼女は、「人は変わっていくから／誰のものにもできない」と書いている。「スマホのメモ欄」の詩では、「君、たとえ僕と一緒になくても絶対浮気するよね。でもいいよ。受け入れるよ。／いつも同じものだったら飽きるでしょ。心が奪われなければ、それでいいよ」という男の言葉に、「え、いいの？ そんな人初めて。／でも好きだから、しないよ。いや、するか。するわ。」と彼女は答える。彼女は、人や自分が変わっていくことを受け入れている。だが、彼女の固定観念はいっさい変わっていない。変わらないが、彼女は大きく揺らいでいく。

ここで、「無題」という詩を全文紹介したい。ちんすこうりなさんの詩集『女の子のためのセックス』には、全43作品が掲載されている。そのなかで、この作品のみが「無題」となっている。「無題」というのは、それが正式なタイトルとして名づけられることもあるが、この詩の場合、ちんすこうさんはふさわしいタイトルをつけることができなかったのではないかと考えている。それほど、「無題」の詩は彼女の気持ちが複雑にからみ合い、彼女が築き上げてきた価値観が大きく揺らぎ、自分の在り方を問う詩となっている。

私は
誰のものにも
ならない
ていうか
なれない
かわりに
誰も
私のものに
ならない

なってくれなくて
いい

夜
ビルの屋上から
ひとり
両手を広げて
安心する
ぴかぴか光る街
どこにも
合わさないですむ目

人は生まれてから死ぬまで一人とか
孤独と自由は同じとか
一瞬が永遠とか
そんな
陳腐な言葉に
なるかな

(人はどうして約束するの)
(変わりたくないから)
じゃああなたは変わらないで
ずっとそのままでしたら
私は変わるよ
あなただけずっとそのまま

いて

くれなくて

いい

楽しすぎて
今
終わってもいいや
とか
終われ
とか
思って
ばかみたいに
家に着いて
天井を見上げながら
涙が
どんどん流れて
止まらない
さみしい
ばかみたいに

ずっと
このまま
こんなふうなのかな
このまま

ずっと

あなた以外の人
あの人とか
あの人なら
わかって
くれるのかな

何を
したいの

(「無題」全文)

彼女は何をしたいのか。その答えとなる詩を、「おわりに」の章で考える。

おわりに

ちんすこうさんの詩集に、「そんな終わり」という詩がある。これは男女の別れを描いた作品である。「マンガ、返さなきゃ」という書き出しから始まる。「会うたびに／貸したり／借りたりした／大量のマンガ／汚さないように／本棚の上の方に並べてある／長くそこにありすぎて／すっかり／馴染んでしまった」と続く。長い恋愛だったのだろう。すっかり馴染んだお互いの関係も読み取れる。だが、今日を最後に二人は別れる。

「別に／貸したの／なんだったか覚えてないし／いないからあげるよ」、「こっちもあげてもいいけど／読み返さないし／邪魔だし／返すよ」と、二人は、貸し借りしたマンガをお互いへ戻していく。そして、「一冊一冊／ていねいに／紙袋に入れていく」のである。途中、マンガを手にしながら、「おもしろかったね／お互い知っていくみたいで」と昔を思い出す。「純情な話だね／／相変わらずえろいね／／こういうのも、悪くないのかも」と二人はマンガを見ながら笑い合う。

そして、「眺める／／すかすかになった一角を／／そんな／／返してもらったマンガ／あ、これめちゃくちゃ好きだったんだよな／／って／読み返しなが／一冊一冊／ていねいに戻していった」。ここで詩は終わる。汚さないように、本棚の上の方に並べていた恋人のマンガを、今、すべて返し終えた。彼女はすかすかになった本棚の一角を眺める。静かに時が流れる。そして、恋人から返してもらったマンガを、すかすかになった場所に一冊一冊ていねいに戻していくのである。

長い年月のあいだに、彼女のマンガは恋人に雑に扱われ、汚されてしまったかもしれない。破られたり、シミもつけられたりしたかもしれない。だが、今、彼女はそれらをていねいに本棚に戻していく。やさしく、大切に、元あった場所に戻す。

「そんな終わり」の詩を、第6章で挙げた、彼女は何をしたいのか、という問いの答えとしたい。すかすかになってしまった自分の場所に、自分をていねいに戻していくこと、これが、彼女の答えではないかと考える。彼女の「真っ暗闇の穴」は、今後も消えることはないだろう。彼女の「嘘」も、なかったことにはできない。傷も残る。だが、それらを持ちつづけながら、自分をていねいに戻していくのである。それは、昔の彼女に戻ることでない。多くの傷を持った今の自分を、やさしく、大切に、ていねいに扱っていくことである。

このたび、私はちんすこうりなさんの詩集『女の子のためのセックス』を、「彼女」という登場人物の長い物語として読んだ。このような読み方がよかったかどうか分から

ないが、私は、詩集に一貫しているものを知りたいと思った。

ちんすこうさんの詩は、一作一作が、彼女の傷によって書かれている。傷と引きかえに、詩を生み出してきたのだろう。彼女の詩は切なく、優しい。そして、詩のなかにはいつも、ひたむきな彼女がいた。ひたむきに人と関わり、ひたむきに嘘をつき、ひたむきに見つめる。ちんすこうりなさんの詩集には、豊かな「彼女」がたくさん詰まっている。